

刊行にあたって

現在2人に1人が罹患するがんは「よくある疾患」となった。

ゆえに、がん患者の口腔管理は「よくある診療」となった。

1981年に悪性腫瘍がわが国における死亡原因の第一位になって以降も、悪性腫瘍による死亡者数は増加を続け、死亡原因の1/3を占めています。がんは日本人の半数近くが一生に一度は罹患するcommon disease（ありふれた疾患）となりました。医師にとっては必須の研修領域となり、どの専門領域であってもがん患者にかかわらずに済むことは不可能といわれています。これは歯科医師も同様と言えましょう。

がん罹患率の増加の背景には、高齢化社会の到来とがんの診断・治療技術の革新による生存率の向上があります。遠隔転移例でも新規薬剤により長期生存が期待できる症例も出てきております。「がんは全身病としてのアプローチが大切」というのが現在の概念です。しかし、有効な治療法が増えるにつれ、さまざまな有害事象・副作用も出現してくることから、治療効果に加えてより安全であること、苦痛をできるだけ緩和し、治療中から治療後も含めて患者のQOLを可能な限り良好に維持していくという支持療法が重要となってきています。そのためには多職種チーム医療が必須であり、より高度な知識と技術が各職種に求められています。

このがん患者に対する支持療法において、歯科医療従事者が提供する口腔ケアや歯科治療が重要であることは、故大田洋二郎先生の報告をその発端とし、がんに関わる医療従事者の誰しもが知るところとなりました。それを受け2010年から国立がん研究センターと日本歯科医会の医科歯科連携事業が始まり、厚生労働省もその必要性を認め、平成24年4月から、「周術期口腔機能管理」としてがん患者の口腔ケア・医科歯科連携が保険収載されました。また、2012年6月に改定された、わが国のがん対策の中核となる「がん対策推進基本計画」においても、がん治療における医科歯科連携による口腔ケアの推進が、取り組むべき施策として新たに記載されました。

しかし、「がんは全身病としてのアプローチが大切」という概念に基づいた多職種チーム医療に歯科医療従事者が関わる時、知っておくべき全体的事項や各がんの病態・治療に関する詳細な解説書はわずかしかありませんでした。

そこで本書は、「がん治療中（いわゆる周術期口腔機能管理の期間）の患

者さんに臨むとき、歯科医療従事者に何を知っておいていただきたいか、何をしておいていただきたいか」について、『がん治療医からの視点』で編纂しました。「がん治療医の視点」というコンセプトの歯科医療従事者向けの書籍は本書がはじめてかと思います。そして、各分野での第一線でご活躍されている医師、歯科医師の先生方に執筆していただきました。

前半の内容は「基礎編 臨床腫瘍学のミニマム・エッセンス」と称して、主治医が最も依頼するであろう5大がん（肺がん・胃がん・大腸がん・乳がん・食道がん）を含めた各種がんの最新の標準治療の解説と、それに関連する事項について大きくページを割きました。

後半は「歯科編 がん患者の口腔機能管理」と称し、がんと診断される前からがん治療中、そして終末期までのさまざまな場面における口腔管理について解説しました。

具体的には、皆さんのクリニックに診療情報提供書を持って患者さんが来院したとき、診療情報提供書に記載されているがんについての内容把握の手引として使っていただくことを「基礎編」の目標としました。その後、どのようにアプローチしたらよいのか、その大筋を示すことを「歯科編」の目標としました。

紙面の都合や日々アップグレードされている内容もあるため、不十分な項目も多々あると思います。随時皆さんのご意見・ご要望をいただき、改善していきたいと考えております。どうかよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、本書の執筆開始から発刊まで3年以上を要してしまったことは、ひとえに私の力不足、遅筆によるものです。ご迷惑をおかけいたしましたことを、関係者の皆様にお詫び申し上げます。また、分担執筆に際して多大なるお力添え賜りました先生方に、深く感謝申し上げます。

そして、何よりも本書の刊行が遅れたことにより、口腔合併症で苦しむこととなったがん患者さんの皆様に、深くお詫び申し上げます。本書の刊行を機に、初心に立ち返り、皆さんと共に学び、励まし助け合いながら、一人でも多くのがん患者さんを支え癒していきたいと思っております。

2015年6月

白渕公敏